

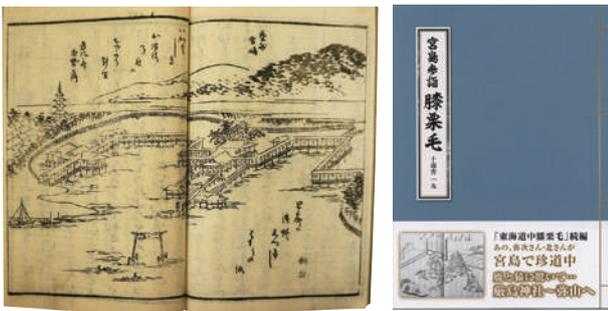
『宮島参詣膝栗毛』の発刊

「宮島の観光に役立てるものを作りたい。」

平成27年9月、株式会社広電宮島ガーデンの森河謙二代表取締役社長が、宮島学センターを訪問された時のご発言です。

ご依頼の内容は、会社設立50周年記念事業の一環として、十返舎一九『続膝栗毛二編上下 宮島参詣』の本文にふりがなや注解を付けて多くの読者に親しんでいただける形として出版したい、というものでした。

江戸時代後期の人気作家 十返舎一九の代表作『東海道中膝栗毛』はベストセラーとなり、次々と続編が出され、文化8年(1811)には『続膝栗毛二編 宮島参詣』が出版されました。



主人公の弥次さんと北さんは、讃岐丸亀から乗船して下津井に渡り、鞆・阿伏兎・尾道など瀬戸内の旅を経て宮島に到着します。あらためて読んでみますと、お馴染みの弥次さん北さんのドタバタ劇とともに、江戸時代の瀬戸内・宮島に触れられる作品であることがわかりました。

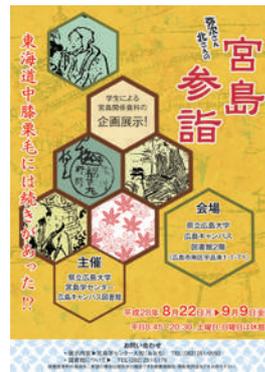
冒頭の森河氏のご発言にも共感し、(株)広電宮島ガーデンからの受託研究として、原本の体裁や表記を読みやすく改めて詳細な注解を付した出版用原稿を作成することとなりました。

国際文化学科の菊池あすかさん、熊本光咲さん、

平松佳奈さん(当時3年生)も協力してくれ、学生らとともに辞書を引ながら原稿を作成し、平成28年3月に『宮島参詣膝栗毛』が出版されました。なお、この本は宮島口のみじ本陣で購入することができます。

図書館企画展示

「弥次さん北さんの宮島参詣 —東海道中膝栗毛には続きがあった!?—」



宮島学センターでは、平成21年の開所以来、毎年夏期に広島キャンパス図書館で企画展示をおこなってきました。8回目となった今年のテーマは「弥次さん北さんの宮島参詣—東海道中膝栗毛には続きがあった!?—」でした。

『宮島参詣膝栗毛』をテキストとして学んだ国際文化学科の3年生16名が中心となって準備し、各場面や宮島学センター所蔵の資料とともに、江戸時代の宮島や旅の様子を様々な角度から紹介しました。

期間中におこなったギャラリートーク(展示解説)では、学生がご来場いただいた皆様に、「弥次さん北さんの珍道中や江戸時代の宮島を思い浮かべながら、ぜひまた宮島を訪れてほしい」とお伝えしました。



今回の企画展示では、判じ絵の解説を通して来館者の皆様との対話を試みました。

「続膝栗毛三編 木曾街道上」では、版元が原稿の催促のために通ってくるような「流行作家生活」を送っていた一九が、自身の苦悩をユーモアあふれる判じ絵で紹介しています。

右の図は、解説をすることができませんでしたが、あえて展示公開し、判じ方についてのご意見を募集しました。すると、展示期間中に来場者の方から、「枕を割って」と解説すべきとの情報をいただきました。「枕を割るほど、夜も悩みながら執筆する」一九の作家生活を表現していたことがわかりました。

〈図版は『続膝栗毛三編 木曾街道上』（宮島学センター所蔵）より引用した〉



室浜砲台跡フィールドワーク

6月4日の午前中は、室浜砲台跡を訪れるフィールドワークを実施しました。

明治27年（1884）日清戦争が始まると広島城内に大本営が設置され、宮島にも部隊と臨時砲台を配置されました。明治30年8月には宮島の鷹ノ巣低砲台、翌31年7月には鷹ノ巣高砲台、10月には室浜砲台が着工されました。

フィールドワークでは、近代の宮島の歴史とともに、明治期の要塞建築についても学びました。



平成28年度「地域文化学（宮島学）」

平成28年度の「地域文化学（宮島学）」は、日本史、日本文化史、日本文学、考古学、英文学、中国文学などを専門とする教員が担当しました。国際文化学科2年生を中心に50名の学生が受講しました。

| 講 義 | | |
|----------|-------------------|-------|
| 4 / 11 | 「地域文化学（宮島学）」とは | 大知 徳子 |
| 4 / 18 | 厳島の舞楽とアジアの文化交流1 | 柳川 順子 |
| 4 / 25 | 厳島の舞楽とアジアの文化交流2 | 柳川 順子 |
| 5 / 16 | 平家納経の世界 | 西本 寮子 |
| 5 / 23 | 平清盛の経済施策と厳島神社信仰 | 鈴木 康之 |
| 5 / 30 | 宮島にもたらされた陶磁器 | 鈴木 康之 |
| 6 / 6 | 藤原神主家と友田興藤 | 秋山 伸隆 |
| 6 / 13 | 毛利氏の厳島信仰 | 秋山 伸隆 |
| 6 / 20 | 近世宮島の賑わい | 大知 徳子 |
| 6 / 27 | 広島城下の商家・保田忠昌と厳島 | 西本 寮子 |
| 7 / 4 | 大聖院蔵「厳島図屏風」の楽しみかた | 大知 徳子 |
| 7 / 11 | 世界遺産厳島神社・原爆ドーム | 秋山 伸隆 |
| 7 / 25 | 外国人が見た明治・大正時代の宮島 | 天野みゆき |
| フィールドワーク | | |
| 6 / 4 | 室浜砲台散策フィールドワーク | 秋山 伸隆 |
| 7 / 4 | グループ課題フィールドワーク | 担当教員 |
| 7 / 20 | 管絃祭フィールドワーク | 大知 徳子 |

平成28年度公開講座・講演会

宮島学センター公開講座

廿日市市教育委員会・廿日市市生涯学習推進本部と共催

第1回

6月8日「友田興藤と大願寺道本・尊海」
 講師：秋山伸隆、大知徳子
 会場：はつかいち文化ホールさくらびあ
 受講者：140名

第2回

12月9日「世界遺産をつたえる — 厳島神社と石見銀山、原爆ドームと宮島ホテル —」
 講演：秋山伸隆
 対談：田淵五十生氏（福山市立大学教育学部教授）
 秋山伸隆、大知徳子



会場：国民宿舍みやじま杜の宿

受講者数：101名

第3回

平成29年2月15日「平清盛の時代の考古学」

会場：国民宿舍みやじま杜の宿

講師：鈴木康之

受講者数：77名

宮島学センター公開講演会

大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）と共催

平成29年1月28日「芸南の文芸と厳島」

講師：西本寮子

会場：大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）

会議室

受講者数：40名



企画展示「世界遺産をつたえるー厳島神社と石見銀山、原爆ドームと宮島ホテルー」

今年厳島神社が世界遺産に登録されて20年という節目の年でした。宮島学センターは、世界遺産登録二十周年記念事業の一つとして宮島歴史民俗資料館との連携展示を開催しました。

まず世界文化遺産厳島神社の価値や魅力をもっと多くの人たちに伝えるために、同じ世界遺産である石見銀山の「かかわり」を明らかにしました。

厳島神社と原爆ドームの間には直接的な「かかわり」はありませんが、原爆ドーム（建設当時は広島県物産陳列館）を設計したチェコ人ヤン・レットルの作品が宮島にもありました。それが宮島ホテルです。そして原爆投下直後の枕崎台風は厳島神社にも大きな被害をもたらしました。復旧工事は困難を極めま



したが、多くの関係者の努力で厳島神社は美しい姿を取り戻しました。展示では先人が貴重な文化財や自然環境を守り伝えるために続けてきた営みを紹介しました。期間中の来館者は1853名でした。

全国厳島神社参詣記⑧

大知 徳子

金刀比羅宮境内摂社 厳島神社

住所：香川県仲多度郡琴平町字川西892番地1

讃岐の金刀比羅宮は、古くから水の神様として航海に携わる人々の信仰を得ており、金刀比羅宮の鎮座する象頭山（ぞうずさん・琴平山）は、瀬戸内海を往き来する航路の目印にされたとも伝わります。とりわけ江戸時代においては、庶民による参詣ブームに乗り、宮島の厳島神社と同様に多くの参詣者を集めました。

江戸時代の大坂は金毘羅参詣の一大拠点でした。享和2年（1802）尾張の商人菱屋平七の『筑紫紀行』によれば、大坂・丸亀間の船が頻繁に行き交い、船頭や水主、丸亀での宿、金刀比羅宮までの案内人、大坂の船宿が提携し、定額で旅行商品を提供していたことが記されています。

『東海道中膝栗毛』の続編として最初に選ばれたのが「金毘羅参詣」であったことも、江戸時代における金毘羅信仰の隆盛をうかがわせます。



「続膝栗毛初編
金毘羅参詣、二編宮島参詣」

加えて十返舎一九は作家デビューを果たす前に大坂で過ごした時期があり、やはり大坂から船で象頭山に参詣したことがありました。続編の執筆は、一九の金毘羅信仰を知った版元の勧めによるものだったといえます（『続膝栗毛初編金毘羅参詣』序文より）。



（宮島学センター所蔵資料）

この金刀比羅宮の境内にも、厳島神社が勧請されており、絵馬堂には厳島を描いた絵馬も掲げられています。



厳島神社



絵馬

実は宮島にも、厳島神社の出口近くに金刀比羅神社が鎮座しており、両社の関係を感じさせます。



厳島神社末社
金刀比羅神社

宮島観光ボランティアガイド講座 (英語)

学生が宮島で外国人観光客に対するボランティアガイド (英語) をおこないました。

宮島学センターでは、毎年10月から12月にかけて、学生を対象にした「宮島観光ボランティアガイド講座」を開講しています。



学生たちは、講座で身につけた知識とテクニックを使って、宮島を訪れた外国人観光客に対するボランティアガイド (英語) をおこないます。



10月30日には、国際文化学科の国際交流事業と連携して、ブラパー大学 (タイ) の学生2名と引率教員1名とともに宮島を歩き、栈橋から厳島神社まで案内しました。

この日は日本語を学ぶ学生たちのために、日本語で宮島の歴史や文化について解説をしました。

この経験を踏まえて、教室でもスクリーンに宮島の映像を投影して練習を重ねました。

12月4日には、ガイドの実践編としてアルスター



大学 (イギリス) の留学生3名 (大学院生1名を含む) を英語で案内しました。

ガイド当日の様子

広島キャンパス図書館に集合し、簡単な自己紹介をしたあと、宮島口まで一緒に移動しました。

宮島口からは、フェリーの中から見える島の様子や、宮島栈橋、海岸通り、有の浦、石鳥居、狛犬、大



鳥居、厳島神社、大願寺などについて解説しました。

おみくじについて説明

御神酒について説明



この日はあいにくの雨でしたが、なごやかな雰囲気
でガイド実践をおこなうことができました。

参加した学生の感想

これまでガイドは、日本語でもしたことがなかったのでよい経験になりました。日常会話とは全く違う難しさがあると感じました。また、小さい時から宮島の近くに住んでいながらも宮島についての知識はほぼなかったもので、非常に興味深く講座を受けることができました。話を聞けば聞くほど、いかに宮島は歴史があり、いかに神聖な場所であるかということを理解できました。これまで何気なく通り過ぎていた神社やお寺も一つ一つに歴史があるということを知ることができたので、これから宮島に行ったときはもみじ饅頭を買うだけではなく、神社やお寺にも興味を持ってみたいと思います。また、知り合いが県外または国外から宮島へ観光に来るときは、今回の講座で学んだ知識を伝えていきます。さらに、鳥居の話や仏教と神道の違いなどは日本全体に共通する話なので、宮島でない場所でも生かしていこうと思います。

(M. Y)

研究余録⑧

おくびのほり 尾頸之堀

宮島棧橋広場の正面に見える小高い岡(標高27m)が、弘治元年(1555)10月1日、毛利元就が陶晴賢を破った厳島合戦の古戦場・要害山です。要害山は、現在は宮尾城跡と呼ばれていますが、「宮尾城」という呼び方は江戸時代以降のもので、合戦当時の古文書には「宮之城」とか「宮要害」として登場します。「宮」=宮島にある城(要害)という意味です。

さて、この城は、一般には毛利元就が陶晴賢を厳島におびき寄せるために築いた囹(おとり)の城と説明されていますが、実際には宮島の港と町(有の浦)を守るための城として、厳島合戦の数十年前から存在していました。天文23年(1554)5月12日に宮島を占領した毛利元就は、自ら普請のため宮島に渡海したといえますから、相当大規模な改修を加えたと考えられます。

要害山は、現在はその周囲が埋め立てられていますが、合戦当時は海に突き出した岬の先端のような地形でした。三方は急斜面で海に落ち込み、北東だけが尾根続きとなっていました。中世では尾根筋が

一番狭くなった場所を「尾頸」と呼びます(城がある尾根の先端は「尾崎」です)。「尾頸」は城をめぐる攻防の焦点となるため、毛利方はここに空堀を設けて敵の侵入を防ごうとしました。

棧橋広場から町屋通り方面に向かうには「みなと隧道」を通りますが、トンネル入口の10mほど手前で、右側の細い坂道を登ってみてください。その先に、両手を広げると指先が届きそうな、狭い切通しがあります。これが宮之城の「尾頸之堀」の跡です。正確に言うと、合戦当時の堀は時間の経過とともに埋まってしまい、後世になって、宮島の住民の通路として再び掘削されたのが現在の切通しです。

厳島合戦直前の9月27日、毛利元就は小早川隆景に宛てた書状で、「宮之城」の「尾頸之堀」が陶方によってほとんど埋められてしまい、城衆が弱っていると伝えています(小早川家文書531号)。この狭い「尾頸之堀」は、文字通り「宮之城」の生命線であり、さらに言えば、毛利元就と陶晴賢の決戦の行方を左右する重要な場所だったのです。

(秋山 伸隆)



要害山 尾頸之堀

資料紹介 小早川隆景書状

宮島学センターでは、今年度新たに古文書1点を購入しました。小早川隆景が渡辺出雲守房に宛てた弘治元年(1555)の書状です。

渡辺氏は備後国南部の国人で、関が原合戦後は毛利氏に従って萩藩士となりました。渡辺家の伝来文書の写は、「譜録 渡辺三郎左衛門直」(山口県文書館・毛利家文庫)に収録され、その一部は『広島県史 古代中世資料編V』にも掲載されています。しかし、この隆景書状は「譜録」には含まれていませんので、新出文書だと考えられます。

書状は切紙と呼ばれる小型の紙に記されています。内容から、厳島合戦の約1ヶ月前、弘治元年(1555)8月27日のものと推定できます。この頃、

隆景は陶軍と対峙するため、兄毛利隆元らとともに「山里表」(廿日市市佐伯町方面)に出陣していました。毛利勢は「一城」の普請を終えて帰陣したが、隆景はこの書状では、「呉瀬戸」の普請を命じて、まもなく新高山城に帰ると伝えています。

山里の「一城」とは、毛利方が築いた「山里要害」のことです。その遺構は、廿日市市河津原の中山城跡と推定されます。毛利元就・隆元が、8月22日付けで野間氏旧臣の新屋新三郎・西新四郎等に「山里要害城番」を命じ、「給地宛行」を約束していることと符合するからです(萩藩閩閩録巻85・169)。

次に「呉瀬戸」の普請ですが、実はこれとよく似た内容の毛利隆元書状(8月26日、渡辺房宛)が「譜録」にあります(『広島県史古代中世資料編V』385頁)。隆元書状には、「隆景事、呉瀬戸両所普請申付候」とあります。つまり音戸瀬戸をはさんで、「呉」と「瀬戸」(倉橋島)の二か所の城普請を命じたのです。

陶氏との決戦を控えていた隆景が、音戸瀬戸の両側で城普請を急いだ理由は何でしょうか? 私は、陶方に属して毛利氏に敵対していた能島村上氏が、音戸瀬戸から広島湾に侵入することを阻止するためであったと考えています。そして隆景の指示を実行したのは、おそらく隆景の重臣乃美宗勝でしょう。

この小早川隆景書状は、厳島合戦直前の緊迫した軍事情勢を伝える貴重な史料です。



小早川隆景書状

就山里表出張、態御
音状祝着之至候、彼面
一城之事普請等頓ニ
相調、諸勢帰陣候、我等事
呉瀬戸為普請可申付
此表逗留候、是も隙明
之条、不日可為帰城候、
仍今度備前面之事、
大利之段、不及申候、越州
御辛勞中々難謝候、大
慶之段、頓ニ可申入候処
依在陣延引、慮外之至候、
猶自是可申候、恐々謹言、
八月廿七日 隆景(花押)
渡辺出雲守殿 御返報



調査報告 御島廻神事

平成28年5月15日、厳島神社の神事「御島廻」に参加しました。「御島廻」では、厳島の浦々にある社を船に乗って順番にめぐり、参拝します。厳島神社の神職が「御師」として参詣者を導き、島を右手に見ながら一周します。

途中で訪れる養父崎神社では「御鳥喰式」という最も重要な儀式をおこないます。

養父崎神社は、厳島神社の祭神が鎮座する場所を探している際に先導の役を果たしたという神鳥を祀っており、「御鳥喰式」では、海上に筏に乗せた糰子(米粉を海水で練った団子)を供え、神鳥の出現を願います。

雌雄2羽の神鳥が現れ、団子をくわえて養父崎神社と背後の弥山に飛び立つと、「御鳥喰が上がった」と言われ、参詣者の願いがかなうとされています。



御師船の舳先に置かれているのが筏と糰子

編集後記

平成28年はテレビ局からの取材協力の依頼が相次ぎました。3月28日「ぶっちゃけ寺」(テレビ朝日)、9月24日「世界ふしぎ発見!」(TBS)と25日「世界遺産」(TBS)、10月1日「プラタモリ」(NHK)の四番組です。ディレクターとの協議や台本のチェックなどにずいぶん時間をかけましたが、多くの関係者の協力で一本の番組が出来上がっていく過程に参加できたことは、私たちにとっても貴重な体験となりました。(A)

編集・発行

宮島学センター通信 第8号

平成29年3月15日発行

県立広島大学宮島学センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号

TEL.082-251-9550

E-mail:miyajima@pu-hiroshima.ac.jp

ホームページ:

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/miyajima/>